

教 育 研 究 業 績 書

2019 年 5 月 1 日

氏名 市川 祥子 印

研 究 分 野

心理学

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1-1. 学生のレベルに合わせたオリジナル教材の作成	2004年4月～ (平成16年) 現在に至る	受講学生の所属学部や学年、資格取得に必要な要件などに合わせて、オリジナル教材を作成し、学生に配布している。特に、資格取得に関わるものに関しては、自宅学習なども積極的にできるよう、ポイントをわかりやすくまとめ、授業中には、それらのテキストに積極的にメモを取るよう指示し、授業への積極的参加を促すように働きかけている。これらのテキストは毎年、少しずつ改良を重ねている。学生からの満足度が高く、理解度も向上し、授業に集中できるなど高い評価を得単に講義を聴くだけでなく、検査を体験させたり、簡単な実験を行うなど、学生が興味を持って講義に参加できるように、学生自身が体験できるような材料をほぼ毎回用意している。また、授業内に一問一答などの小テストを設けたり、毎回の講義に即したテーマを与え、それについてミニレポートを書かせるなど、理解度を深める工夫を行っている。学生からは、授業内容に対する関心度や理解度が向上したり、積極的に授業に参加で
1-2. 受講生の参加度と理解度を深める授業方法	2004年4月～ (平成16年) 現在に至る	全ての授業に関して、毎回、授業についての感想・質問票を提出させている。学生からのコメントに関しては、次回の授業で必ずフィードバックを行い、400人を超える受講生がいる授業でも、学生とのコミュニケーションを大切にし、一方通行の授業にならないよう工夫を行っている。これをきっかけに、自ら積極的に質問等をしてくる学生も増えている。
1-3. 学生からの授業評価を活用した授業	2004年4月～ (平成16年) 現在に至る	演習授業や少人数の授業において、社会におけるリアルな現場を想定し、問題点や解決方法などについてディスカッションやディベートをさせる授業を実施。他者に対し、効果的に意見を述べるなど、コミュニケーションスキルを向上させるための工夫として取り入れた。学生が楽しみながら、積極的に授業に参加できることから、学生の評価も高い。ディスカッションやディベートに関しては、講義形式の授業でも、状況に応じて取り入れるようにしている。
1-4. ロールプレイングやディスカッション・ディベートなど授業内での体験学習の工夫	2004年4月～ (平成16年) 現在に至る	学生がより集中し楽しんで聴講できるよう、内容に関連したDVDや映像などを適宜利用している。使用するDVDなどは、インターネットやTVなどから入手したものを、講義の内容に合わせて自ら編集し使用している。視覚から得られる情報によって、学生の興味関心を喚起したり、理解度を深める手段として効果が上がっている。学生からも評価が高い。
1-5. マルチ・メディアを利用した授業	2008年4月～ (平成20年) 現在に至る	講義形式の授業において、視覚的情報が有効な場合など、必要に応じてパワーポイントを使用した授業を行っている。
1-6. パワーポイントの使用	2008年4月～ (平成20年) 現在に至る	より実社会と結びつけてイメージできるよう、概論を中心とした授業を中心に、必要に応じて新聞や雑誌、インターネットの記事を用い、学生の関心を喚起するよう工夫を行っている。
1-7. 新聞・雑誌の記事などの利用	2008年4月～ (平成20年) 現在に至る	
1-7. 大学院進学希望者への実践的指導と評価用紙の導入	2009年4月～ (平成21年) 2015年3月 (平成27年3月)	大学院進学希望の学生を中心とした関西国際大学人間科学部「心理学特別演習Ⅲ」（専門科目、3～4年次配当、半期、2単位）では、科学論文の読み方やレジュメのまとめ方を具体的に指導し、進学に必要なスキルを身につけるための指導を実施。授業では、学生に、関心のある論文を自ら学術雑誌から探すことからはじめさせ、それらをレジュメにし、順番にプレゼンテーションさせた。レジュメやプレゼンテーションに関しては、毎回、個別

<p>1-8. 統計ソフトを使った授業 (SPSS)</p> <p>1-9. フィールドワーク</p>	<p>2009年9月～ (平成21年) 2015年3月 (平成27年3月)</p> <p>2009年9月～ (平成21年) 現在に至る</p>	<p>に指導を行い、次回の発表等でブラッシュアップできるようにした。また、学生同士、ディスカッションさせることで、研究テーマへの理解を深めたり、プレゼンテーション能力を高められるような指導を実施。また、プレゼンテーションに関しては、評価用紙を作成し、教員からの評価だけでなく、自己評価や学生相互の評価も行うことで、学生が具体的な目標を持って授業に臨める工夫を行った。大学院進学希望者だけでなく、卒業論文大学院進学希望の学生を中心とした関西国際大学人間科学部「心理学特別演習Ⅳ」(専門科目、3～4年次配当、半期、2単位)では、統計について、SPSSの統計ソフトを使用した授業を実施。授業では、基本的な統計手法から、大学院入学後、すぐに実践できる統計手法まで幅広く教え(記述統計、χ^2検定、t検定、分散分析など)、学生には、データの収集、分析からレポート作成までさせることで、卒業論文をはじめ、大学院進学後に必要なスキルを具体的に身につけることができる指導を行った。レポートは最終提出までに何度も添削し、学生にブラッシュアップさせると同時に、授業内でスキルアップできる指導を行った。学生からは、とてもわかりやすく、具体的なスキルが確かなものに仕上がったと好評を得ている。日常生活に密着したデータを、雑誌やインターネットなどを利用して学生自身に収集させたり準備したものについてディスカッションを行ったりしている。人と社会との関係を実感し、分析結果を楽しむにしながら統計手法を身につけられる方法として取り入れた。また、校外学習で実際にデータを取るといった取り組みも行っている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材</p> <p>2-1. 「社会心理学」</p> <p>2-2. 「教育心理学」</p> <p>2-3. 「教師と児童・生徒のコミュニケーション」</p>	<p>2008年9月～ (平成20年)</p> <p>2011年4月～ (平成23年)</p> <p>2019年3月</p>	<p>A4・31項の教材を授業用に作成。佛教大学社会学部「社会心理学」(専門科目、2年次～4年次配当、半期、2単位)で使用。心理学、社会心理学、コミュニケーションに関する図書十数冊や関連文献等参考にして、社会心理学の概観をきちんと学びつつ、学生が社会とヒト、ヒトとヒト、ヒトとモノとを結び付けて社会全体を捉えられるような内容で構成。個から集団・集合という流れで全体の教材を構成し、学生の関心を多く惹く内容とした。講義内での説明と併せて、とてもわかりやすく、且つ関心を持てる内容であるとの高い評価を得ており、他学部、大学院、他大学の受講生もいる。</p> <p>A4・33項の教材を授業用に作成。佛教大学教育学部「教育心理学」(専門科目、2年次～4年次、半期、必修2単位)で使用。教職免許を取得する上で必要な科目であることから、教育心理学及び心理学、社会心理学の図書十数冊や関連文献等参考にし、教員採用試験の内容を吟味した上で、効率よく学習できる教材を作成した。学生が実際の教育現場をイメージしやすい内容を盛り込み、単にテクニカル・タームを学ぶためのものではなく、様々な事象について自分たちなりに具体的に考えられるように工夫を行っている。講義内の説明と併せて、とてもわかりやすく、教員採用試験の勉強にも役立ち、内容も興味を持てるよう工夫がされていて、毎回楽しく受講できたなど、受講生から高い評価を得ている。</p> <p>研究業績「著書」を参照</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p>		
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p>		
<p>5 その他</p> <p>5-1. 企業からの講師招聘におけるプロジェクトへの参加</p>	<p>2002年4月 (平成14年) ～2004年3月 (平成16年)</p>	<p>神戸大学国際文化学部において、東洋ゴム工業株式会社取締役会長/片山松造氏、元ドイツTOYOTA社長・元スウォッチグループ・ジャパン社長/宮地俊雄氏、特定非営利活動法人「アムダ」海外事業本部長/鈴木俊介氏、元ジャトコ株式会社専務取締役/坂本研一氏、元東洋ゴム工業株式会社常務取締役・技術開発統括本部長/橋田泰三氏ら、10人の企業人を講師として招聘するプロジェクトに参加。国際化や異文化接触、コミュニケーションという内容にふれながら、大学生活と現実の社会との接点をこの講義によって見出していくというコンセプトのもと、企業人による講義をコーディネートした。このプロジェクトを通じて、神戸大学国際文化学部</p>

5-2. ニッケグループによる受託研究	2017年12月 (平成29年) ～	フイネート。2年にわたって、神戸大学国際文化化学部において、開講された。これらの講義は、『神戸大学国際文化化学部講義録・自動車関連産業からの国際文化と異文化交流』として出版された。本プロジェクトは指導教官であった瀧上凱令教授の元で実施された。
5-3. 講演：『NIKKE SCHOOL EXPO 2018 ウールで紡ぐ子どもたちの未来』における大阪講演	2018年6月14日	『NIKKE SCHOOL EXPO 2018 ウールで紡ぐ子どもたちの未来』における講演「被服と心理学—装いを科学する—」（於 大阪綿業会館）
5-4. 講演：『NIKKE SCHOOL EXPO 2018 ウールで紡ぐ子どもたちの未来』における東京講演	2018年6月29日	『NIKKE SCHOOL EXPO 2018 ウールで紡ぐ子どもたちの未来』における講演「被服と心理学—装いを科学する—」（於 東京時事通信ホール）
5-5. ラジオ10分間講座	2018年8月17日	F M宝塚ラジオ10分間講座 栄養と心の目において『被服と心理学』について講義した。
5-6. 甲子園大学公開講座における講座担当	2019年2月28日	甲子園大学公開講座において「ファッションと心理学～服の色で印象を変えよう～」の講座を担当
5-7. 高校大学連携出張講義	2019年3月14日	株式会社さんぼう主催の高校内ガイダンスにおいて、百合学院高等学校にて大学で実際に行われている授業の体験として社会心理学の模擬授業を
5-8. 講演：『全国学校服連合会 第31回定時全国大会』における講演	2019年7月24日	『全国学校服連合会 第31回定時全国大会』における講演「学校制服にできること～子どもたちの未来について考える～」（於 有馬グラウンドホテ

職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1-1. ファッション能力ビジネス検定2級	2007年 12月20日 (平成19年)	認定番号07N000632
1-2. 日本心理学諸学会連合認定心理学検定1級	2008年 10月1日 (平成20年)	科目領域①原理・研究法・歴史②学習・認知・知覚③発達・教育④社会・感情・性格⑤神経・生理⑥産業・組織、以上において検定合格。No. 080974
1-3. 日本心理学会認定心理士資格	2012年 10月20日 (平成24年)	登録番号 第39073号
2 特許等 得になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 新しい教職課程講座教職教育編4 教育心理学 第11章 教師と児童・生徒のコミュニケーション	共著	2019年3月 (平成31年)	ミネルヴァ書房	原清治・春日井敏之・篠原正典・森田真樹（監修）「新しい教職課程講座」全23巻における橋本憲尚・神藤貴昭（編著）『教職教育編第4巻 教育心理学』「第11章 教師と児童・生徒のコミュニケーション」を単独執筆。新学習指導要領に対応したテキストシリーズの教職教育編。担当章はコミュニケーションという社会心理学的視点から学校教育を捉える目的で著されており、学校における対人関係を中心に、現代の子どもたちをとりまく環境や子どもの多様性に触れながら教師と児童・生徒のコミュニケーションについて解説。
2. 栄養と心の目 甲子園大学ラジオ名講座集 第1号 第7講 被服と心理学—装いを科学する—	共著	2019年2月 (平成31年)	甲子園大学	F M宝塚の甲子園大学ラジオ講座において講義した内容について執筆。被服の役割やそれに関わる人間関係、自己との関係について解説。学校制服が子どもたちのアイデンティティ形成にはじまり、経済的な問題や安全、学習環境、対人関係と深い関係を持つことについても言及している。P. 14～p. 15 (2項)

<p>(学術論文)</p> <p>1. ファッション関心と消費行動にみるファッションへの意識差に関する一考察—日本と中国上海の比較—</p>	<p>単著</p>	<p>2013年3月 (平成25年)</p>	<p>奈良産業大学紀要, vol. 29, March 2013, 1-9</p>	<p>日本と中国の若者のファッション関心と消費行動について、中国上海在住の大学生267名と日本在住日本人大学生350名を調査対象とした研究。ファッションに関する項目に關し、日中で抽出された因子を比較したところ、いずれも流行を重視し、積極的に採用しようとする傾向が顕著に現れた。しかしながら、友人など他者との協調性を重視する因子、購入価格に関する因子については、中国では抽出されず、日本の若者のみに見られた傾向であった。特に協調性に関する因子は、相互協調的自己観を持つ東洋文化によく見られる自己観に通じるものであるが、同じアジア圏でも、ファッションへの意識や行動については、本調査では、中国上海においてこのような自己観を推測する結果を得ることはできず、ファッション行動の独特な側面を推測し得るものとなった。ファッションは「第二の皮膚」とも言われており、自己とも深く関わる存在であると考えられているが、自己観の捉え方に対する大きな枠組みの中で、相互協調的自己観を持ちつつ、相互独立的自己観を持つ側面があることを明らかにする結果が示唆された。また、日本の若者は、中国上海の若者よりもファッションへの消費が積極的で、ある意味、自己への投資が積極的であるが、中国では親など身近な人のために積極的に消費を行う傾向が明らかになった。このことから、家族との関係が消費傾向に影響を与える要因の1つといえる。</p>
<p>(その他)</p> <p>1 (研究発表)</p> <p>1-1. ファッション関心と消費行動における大学生の意識変化</p>	<p>単独</p>	<p>2013年11月 (平成25年)</p>	<p>日本社会心理学会 第54回大会 (於 沖縄国際大学) 大会発表論文集, 480</p>	<p>若者のファッション関心と消費行動における意識について、約10年間でどのように意識が変化があったのか大学生を対象に調査を実施。調査対象者は2004年調査において男子172名、女子178名、2013年調査において男子118名、女子100名。消費意識については、バーチャル財布を設定し、消費に関する意識の数値化を試みた。ファッション関心の因子構造に大きな変化は見られなかったが、2004年で「気分高揚」因子に含まれた項目が2013年には「流行」に関わる因子に含まれる結果となった。気分の高揚は流行のファッションを採用しているかどうかといった状況に通じるものとして捉えられている可能性が示唆された。2004年、2013年いずれにおいてもブランド情報認知度に男女差が見られ、更に、認知度は男子大学生において減少傾向がみられ、男子大学生のブランド物への関心が薄れたことが示唆された。また偽物を持つくらいなら要らない、本物を買うほど執着もしていないという意識が垣間見られた。消費傾向に関しては、男子大学生においてのみ、友人との交流、親など身近な人のための消費といった人間関係に関わる項目の増加傾向がみられた。男子大学生の消費傾向は、2004年と比較すると1位と2位が逆転し、「ファッションアイテム」への消費は「友人との外食」への消費を下回る結果となった。</p>
<p>1-2. 被服行動に対する心理的負担と他者意識との関係</p>	<p>単独</p>	<p>2014年9月 (平成26年)</p>	<p>日本心理学会第78回大会 (於 同志社大学) 大会発表論文集</p>	<p>本研究では女子大学生193名を対象とした質問紙調査を実施し、若者が被服行動に対しどのような心理的負担を感じているのか、その心理的負担と実際の被服行動や他者意識との関係について検討した。分析の結果、機能性に気を配ることに心理的負担を感じない女子大学生は、流行に気を配ることに心理的負担を感じないこと、また外的他者意識が高く、流行行動を積極的に行う傾向があり、装いによって他者評価の変化が生じる可能性を考えて衣服選択を行うことに心理的負担を感じにくいことがわかった。一方、機能性に気を配ることに心理的負担を感じながら被服行動を行う女子大学生は、適切性を考えることにも心理的負担を感じ、結果的に、常識や自身の中にある枠組みに適合するかどうかを考えることにも負担を感じるため、流行行動から遠ざかる傾向にあること、また他者の目を気にしすぎて、装うということに對し気楽に“楽しむ”という意識ではないことが推測される結果となった。若者は単にファッションを楽しむにとどまらず、それぞれに心理的負担を感じながら被服行動を行っていることが示唆された。</p>
<p>1-3. ファッション関心度と集団主義傾向との関係性についての一考察—制服着用経験はファッションへの関心と行動傾向に影響するのか—</p>	<p>単独</p>	<p>2016年6月 (平成28年)</p>	<p>日本繊維製品消費科学会 2016年年次大会 (於 東京家政大学) 研究発表要旨, 165</p>	<p>本研究は、学校制服が子どものアイデンティティ形成や行動傾向にどのような影響を与えるのかについて明らかにするための初動研究であり、集団主義傾向とファッションへの関心に注目した研究である。本研究では女子大学生108名を対象に質問紙調査を実施し、小・中・高・大学時における学校制服着用経験の有無により、関心度、行動傾向、他者意識、自己観、消費傾向、購買行動、購入価格に関する因子を比較したところ、いずれも流行を重視し、積極的に採用しようとする傾向が顕著に現れた。しかしながら、友人など他者との協調性を重視する因子、購入価格に関する因子については、中国では抽出されず、日本の若者のみに見られた傾向であった。特に協調性に関する因子は、相互協調的自己観を持つ東洋文化によく見られる自己観に通じるものであるが、同じアジア圏でも、ファッションへの意識や行動については、本調査では、中国上海においてこのような自己観を推測する結果を得ることはできず、ファッション行動の独特な側面を推測し得るものとなった。ファッションは「第二の皮膚」とも言われており、自己とも深く関わる存在であると考えられているが、自己観の捉え方に対する大きな枠組みの中で、相互協調的自己観を持ちつつ、相互独立的自己観を持つ側面があることを明らかにする結果が示唆された。また、日本の若者は、中国上海の若者よりもファッションへの消費が積極的で、ある意味、自己への投資が積極的であるが、中国では親など身近な人のために積極的に消費を行う傾向が明らかになった。このことから、家族との関係が消費傾向に影響を与える要因の1つといえる。</p>

<p>1-4. 制服着用経験がファッション関心度と集団主義傾向の関係に与える影響についての一考察—男女による影響の違いについて—</p>	<p>単独</p>	<p>2016年9月 (平成28年)</p>	<p>日本社会心理学会 第57回大会 (於 関西学院大学) 大会発表論文集, 245</p>	<p>学校制服着用経験の有無によってファッション関心度の各次元と集団主義傾向にどのような関係が見られるか検討した。分析の結果、集団主義尺度とファッション関心度尺度「同調性因子」との間に正の相関がみられ、制服着用経験の影響については小学生時の経験の有無のみ集団主義傾向に有意差がみられ、制服着用経験有の場合の方が、着用経験無の場合よりも集団主義傾向が強いことが明らかになった。これは、発達段階の比較的早い児童期に、他者との同調的環境を経験するか否かは、その後の集団主義傾向の強さに影響を与える可能性があり、また子どもたちがどのような自己を形成してくかということに影響を与えることを示唆している。 本研究は、学校制服が子どものアイデンティティ形成や行動傾向にどのような影響を与えるのかについて明らかにするための初動研究である。本研究では男子大学生146名、女子大学生108名を対象に質問紙調査を実施し、小・中・高・大学時における学校制服着用経験の有無によってファッション関心度の各次元と集団主義傾向にどのような関係がみられるか、またその関係性には男女差みられるか検討した。男女における相関分析の類似傾向から、児童期に制服着用を経験していない場合、集団主義傾向が高まるにつれてファッションにおける同調性も高まる可能性が示唆された一方で、制服着用経験者には同様の傾向がみられなかった。また、男女における相関分析の相違傾向から、男子では、児童期に制服着用経験をした場合、集団主義傾向が高まるにつれてファッションにおける積極性が低くなる傾向がみられたが、女子では同様の傾向は見られなかった。</p>
<p>1-5. 子どもたちの仲間意識における学校制服の役割—学校制服のアレンジは仲間意識を強化するのか—</p>	<p>単独</p>	<p>2017年6月 (平成29年)</p>	<p>日本繊維製品消費科学会 2017年年次大会 (於 京都女子大学) 研究発表要旨, 128</p>	<p>本研究では、大学生206名を対象として小・中・高校時における制服着用の有無と制服に対する好感度の関係、及び制服のアレンジや私服・私服的着用方法の同調が仲間意識にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的とした。制服に対する好感度に関しては、着用経験者の場合、小・中・高校生時のいずれにおいても肯定的意見が否定的意見を有意に上回ったが、理由からは被服選択における消極性が明らかになった。小学生時非着用者においては、機能性と自由度の高さから私服着用への好感度が高くなり、結果的に自身の経験した方を肯定的に捉える傾向がみられた。制服アレンジに関して、そのアレンジ率をみたところ、小学生時には積極的には見られなかったが、中学生になるとその割合は上昇し、高校生になると下降した。いずれの段階においても制服アレンジによって仲間意識を強く感じていた者が一定数存在し、友人関係が強化化する中学生時において</p>
<p>1-6. 学校制服が共感性に与える影響</p>	<p>単独</p>	<p>2019年6月 (令和元年)</p>	<p>日本繊維製品消費科学会 2019年年次大会 (於 奈良女子大学)</p>	<p>本研究では、大学生382名を対象として小学生時における制服着用経験が共感経験における傾向にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的とした。共感性は他者に共感できる能力とされ、共感性の高さは対人関係を円滑にすることにもつながる。また、健全な共感性には個別性の認識が重要とされ、自他の区別をした上での他者への共感が望ましいとされる。共感性の発達に影響を与える要因はさまざまであるが、学校制服の着用によって外見の画一化がなされることによって、外見による個性化や個別性の認識ではなく外見以外の面において自己と他者を意識することを促し、自他の区別をより明確に意識させる可能性があると考えられる。本研究では、共感経験尺度を使用し、小学生時の学校制服着用者と非着用者を比較した結果、女子SISE高群において、学校制服着用者の方が非着用者に比べてSISEの値が高くなる傾向が明らかになった。</p>
<p>1 この書類は、学長（高等専門学校にあっては校長）及び専任教員について作成すること。 2 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。 3 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。 4 「氏名」は、本人が自署すること。 5 印影は、印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし、やむを得ない事由があるときは、省略することができる。この場合において、「氏名」は、旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。</p>				